



TITLE:

静脩 Vol. 46 No. 2 (2009.10) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 46 No. 2 (2009.10) [全文]. 静脩 2009, 46(2)

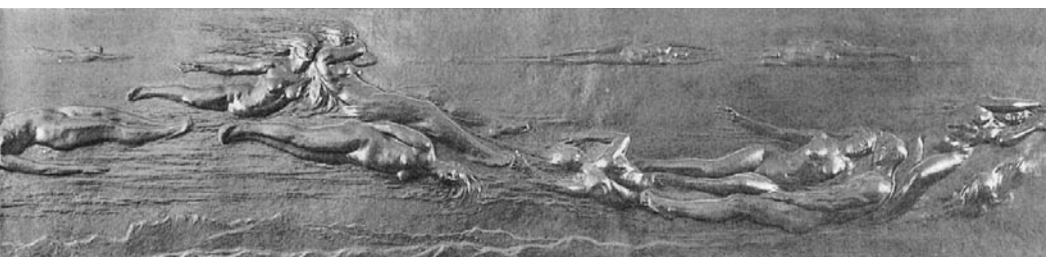
ISSUE DATE:

2009-10-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87750>

RIGHT:



静脩

2009年10月

The Kyoto University Library Network Bulletin

Vol. 46. No. 2

<特集：図書館への期待2>

図書館を採点！

京都大学図書館機構利用者アンケート調査報告

図書館機構では、『図書館を採点！』をキャッチフレーズに、昨年12月から今年1月にかけて、図書館・室利用者アンケート調査を実施し、京都大学全構成員の1割強、3007人の利用者の方から回答をいただきました。1999年以来約10年ぶりとなった今回の調査ですが、本稿では、このたびまとめられたアンケート調査報告書から「図書館への期待」を読み取ります。

なお、アンケート調査報告書は、京都大学学術情報リポジトリに掲載されていますので、詳細についてはそちらをご覧ください。 URL: <http://hdl.handle.net/2433/85260>

調査目的

京都大学の全構成員から、図書館に対する意見・要望を広く収集し、その結果を今後の施策の参考とする。

調査対象

京都大学全構成員

調査時期

平成20年12月17日(水)～平成21年1月30日(金)

調査方法

アンケート用紙およびWebによる調査

調査単位

京都大学全図書館・室

回収方法

各図書館・室等に設置する回収箱への投函およびWeb

LIBRARY AS PLACE

■ DESIRED
● PERCEIVED

図書館を採点!

期間: 平成20年12月17日(水)～平成21年1月30日(金)
方法: アンケート用紙 もしくは Web (URL: <http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/quest/>)

※ 各図書館・室等に設置する「回収箱」もしくはWebで投函してください。

利用者のみなさまのご意見・ご要望を把握し、今後の図書館サービスの向上に活かしていくため、アンケート調査を実施いたします。ご協力お願いいたします。

京都大学図書館機構利用者アンケート

連絡先: 京都大学図書館機構事務局(附属図書館総務課企画・広報グループ)
Tel. 075-753-2813 Mail: library-quest@kulib.kyoto-u.ac.jp

図書館への利用者の期待

アンケート調査では、図書館サービス 27 項目に対する期待度と現状評価を 7 段階で回答していただきました。表 1 はその結果をマトリクス図に示したものの、表 2 は期待度を高い順にリスト化したものです。

表 1. アンケート調査結果に見る図書館への期待と評価

全 体	評価：低 4.41未満	評価：中 4.41以上、5.00未満	評価：高 5.00以上
期待：高 ↑ 5.70以上	16:開館時間が適切で利用しやすい	12:雑誌、電子ジャーナルが十分に揃っている 15:開館日が適切で利用しやすい 11:図書が十分に揃っている	2:図書館・室内が清潔である 1:図書館・室が便利な場所にある 3:図書館・室内は、快適で居心地がよい 8:学習、研究に集中できる
5.70未満 期待：中 ↑ 5.00以上	4:机・椅子の数が十分に使いやすい	27:クレームへの対応が迅速・適切である 20:館内の案内や掲示がわかりやすい 23:図書館・室のホームページが利用しやすい 18:図書・複写物を学内・外を問わず迅速に取寄せることができる 13:辞書・事典類が十分に揃っている 14:データベースが充実している 17:貸出冊数、貸出期間が適切である 19:資料がわかりやすく配置されている	9:図書館・室内は安全である 26:窓口・館内での職員の対応が良い
5.00未満 ↓ 期待：低	25:図書館・室がおこなう講習会が充実している 5:グループで利用できる場所が整っている 6:複写機が適切に使いやすく配置されている 10:障害者の利用に配慮されている 7:必要な機能を備えたパソコンが十分にある	21:図書館・室の配布物が容易に入手できる 22:図書館・室の配布物の内容がわかりやすい 24:図書館・室のホームページが充実している	

赤字の項目は満足度が低い。(0.8未満) 満足度 = 評価 ÷ 期待度。

それぞれのマスの中では、上の方の満足度が高い。

青字の項目は認知度が低い。(「現状に対する評価」のN(わからない)の割合が40%以上)

図書館への期待は「図書が十分に揃っている」こと

期待度が最も高い項目は「図書が十分に揃っている」(7段階平均 6.143)でした。一方、その満足度(0.745)は全項目の中で2番目に低いという結果になりました(表2)。

インターネットであらゆる情報を得られるようになったと言われる現在ですが、著者や出版社が確かである図書は、今なお強く求められていることが数値として示されました。大学図書館は、急速に増加する電子ジャーナルやデータベースに目を奪われがちですが、それらは図書に置き換わるものではないことが確認されました。

表 2 . 期待度ランキング

No	項 目	回答平均値			N(わからない)と回答した人の比率	
		期待度(a)	現状評価(b)	満足度 (b) ÷ (a)	期待度	現状評価
11	図書が十分に揃っている	6.143	4.579	0.745	9.1%	11.8%
16	開館時間が適切で利用しやすい	6.003	4.403	0.734	9.4%	10.7%
15	開館日が適切で利用しやすい	5.988	4.550	0.760	9.6%	10.8%
3	図書館・室内は、快適で居心地がよい	5.888	5.208	0.885	7.8%	8.3%
12	雑誌、電子ジャーナルが十分に揃っている	5.820	4.802	0.825	14.1%	22.5%
8	学習、研究に集中できる	5.819	5.039	0.866	9.3%	12.0%
1	図書館・室が便利な場所にある	5.800	5.437	0.937	7.7%	6.6%
2	図書館・室内が清潔である	5.738	5.568	0.970	7.1%	7.3%
9	図書館・室内は安全である	5.686	5.398	0.949	9.9%	14.1%
4	机・椅子の数が十分に使いやすい	5.679	4.397	0.774	8.6%	9.7%
19	資料がわかりやすく配置されている	5.604	4.723	0.843	12.0%	15.3%
14	データベースが充実している	5.574	4.805	0.862	19.7%	31.6%
26	窓口・館内での職員の対応が良い	5.565	5.221	0.938	11.0%	14.6%
13	辞書・事典類が十分に揃っている	5.522	4.785	0.866	15.2%	25.4%
17	貸出冊数、貸出期間が適切である	5.520	4.727	0.856	12.4%	15.1%
18	図書・複写物を学内・外を問わず迅速に取寄せることができる	5.446	4.731	0.869	25.3%	43.6%
27	クレームへの対応が迅速・適切である	5.275	4.860	0.921	27.2%	49.1%
23	図書館・室のホームページが利用しやすい	5.160	4.573	0.886	16.0%	24.1%
20	館内の案内や掲示がわかりやすい	5.128	4.546	0.886	13.3%	17.7%
24	図書館・室のホームページが充実している	4.986	4.503	0.903	17.3%	26.6%
7	必要な機能を備えたパソコンが十分にある	4.977	4.092	0.822	12.3%	19.0%
6	複写機が適切に使いやすく配置されている	4.902	4.164	0.849	14.6%	22.1%
10	障害者の利用に配慮されている	4.889	4.148	0.848	23.5%	40.7%
22	図書館・室の配布物の内容がわかりやすい	4.503	4.544	1.009	21.1%	36.6%
21	図書館・室の配布物が容易に入手できる	4.463	4.637	1.039	19.2%	32.3%
25	図書館・室がおこなう講習会が充実している	4.112	4.286	1.042	29.2%	51.5%
5	グループで利用できる場所が整っている	3.650	3.626	0.993	16.6%	28.7%

「回答平均値」は、有効回答数(=「N(わからない)」を除いた数)の平均値。小数点以下第4位を四捨五入。

学習・研究の場所としての図書館

「図書が十分に揃っている」に次いで期待度が高い項目は「開館時間が適切で利用しやすい」でした。以下、「開館日が適切で利用しやすい」「図書館・室内は、快適で居心地がよい」と続くことは、場所としての機能が、図書館に期待されていることを意味します。

しかし、「開館時間が適切で利用しやすい」の満足度は27項目中最低です(0.734)。開館時間の延長は、附属図書館の学習室24など、各図書館・室において対策を講じてはいるものの、予算と人員には限りがあり、非常に難しい課題とされてきました。今回のアンケート調査結果は、この問題の再検討を促すものとなりました。

表 3 . 図書館サービスの知名度

		全 体	文 系	理 系	総合・その他
相 談 書 館 の 利 用 に 関 す る	学内の資料取り寄せ	1917(2)	416(4)	1312(3)	189(3)
	学外の資料取り寄せ	1818(4)	425(3)	1202(4)	191(2)
	図書館利用案内	1408(6)	371(5)	882(6)	155(6)
	他大学図書館への紹介状発行	788(10)	266(9)	414(10)	108(9)
	文献調査等に関する相談	718(11)	232(11)	384(12)	102(10)
	資料調査方法講習会	827(9)	283(8)	448(9)	96(11)
ら の 情 報 が	広報誌「静脩」	598(12)	110(14)	403(11)	85(12)
	図書館のメールマガジン	325(19)	83(19)	187(19)	55(19)
	レファレンス・ガイド	262(20)	95(17)	117(20)	50(20)
施 設	研究個室	592(13)	168(12)	358(13)	66(16)
	グループ学習室	573(14)	156(13)	350(14)	67(15)
	インターネット端末	1761(5)	427(2)	1165(5)	169(5)
電 子 情 報	蔵書検索 KULINE	2326(1)	546(1)	1548(1)	232(1)
	MyKULINE	1184(8)	364(6)	682(8)	138(7)
	電子ジャーナル	1890(3)	318(7)	1396(2)	176(4)
	データベース	1232(7)	264(10)	834(7)	134(8)
	電子ブック	496(15)	109(15)	319(16)	68(13)
	貴重資料画像	365(17)	109(15)	188(18)	68(13)
	学術情報リポジトリ KURENAI	365(17)	89(18)	218(17)	58(17)
	博士学位論文 DB	452(16)	74(20)	321(15)	57(18)
	有効回答数	2792	609	1917	266

括弧内の数値は順位 は上位5位 は下位5位

講習会で知る図書館サービス

最も高い満足度(1.042)を得た項目は「図書館・室がおこなう講習会が充実している」です。高い評価は、図書館機構にとって大変励みになりましたが、図書館サービスを知っていただくための講習会の認知度が全項目の中で最低(51.50%)であり、期待度も低い、という問題点も明らかになりました。

まずは図書館サービスに対する期待度を高めていただくために、講習会の広報に力を入れ、様々な図書館サービスの存在とその活用方法を知っていただく必要があります。

知名度から見た図書館サービス

KULINE と KURENAI

広報の課題は、図書館サービスの知名度調

査からも見えてきました（表3）。

最も知名度が高い「蔵書検索 KULINE」は、図書・雑誌の所在を調べるために不可欠のツールであり、当然の結果と言えます。「蔵書検索 KULINE」以外の電子情報では「電子ジャーナル」「データベース」のように図書館が契約し、提供しているサービスはよく知られて

いましたが、それに対し、「学術情報リポジトリ紅（KURENAI）」「貴重資料画像」「博士学位論文DB」など、図書館機構発のサービスの知名度は低いことが分かりました。同じく図書館機構が作成している「図書館のメールマガジン」「レファレンスガイド」もあまり知られていません。

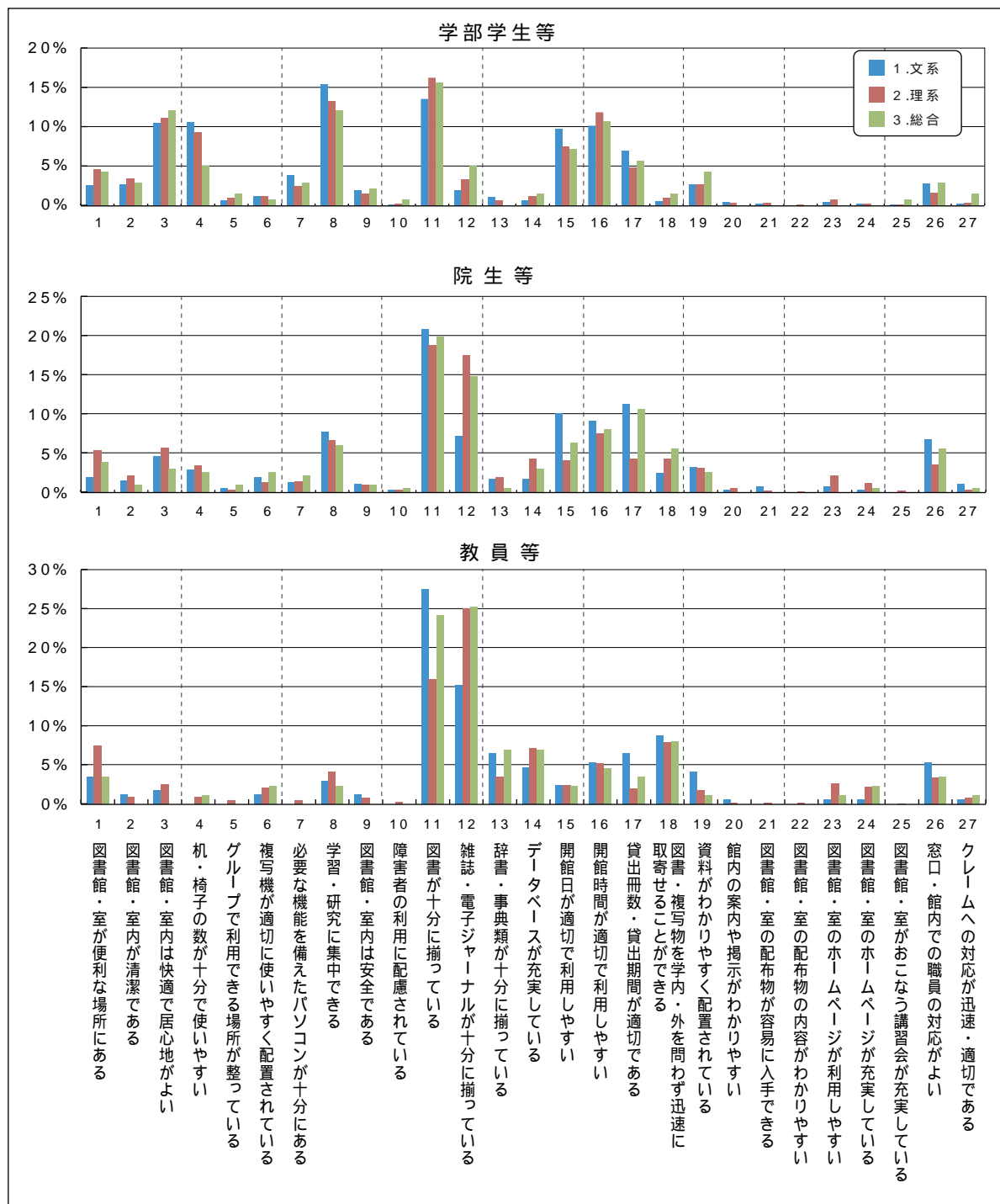


図1．重視するサービス

これら図書館機構が発信する情報は、そのデータ量において出版社などによる電子ジャーナルやデータベースには及びません。しかし、京都大学学術情報リポジトリ紅（KURENAI）は、一方で、スペイン高等科学研究院による世界の機関リポジトリ・ランキングで国内第1位（世界第24位）という高い評価を得ています（2009年7月）。

これらを活用していただくためには、さらなる内容の充実に加え、広報も工夫していかなければならないと考えられます。

文系・理系、学生・教員の期待の違い

図書館サービス27項目の中から、重視するものを3つまで選んでいた調査の結果には、文系と理系、学生と教員による図書館への期待の相違と共通点が現れました（図1）。

文系利用者が重視する項目は、「図書が十分に揃っている」「学習、研究に集中できる」「開館時間が適切で利用しやすい」の順でした。理系でも1位はやはり「図書が十分に揃っている」であり、2位に「雑誌・電子ジャーナ

ルが十分に揃っている」が挙がりました。

従来、理系利用者は、図書以上に雑誌や電子ジャーナルを重視すると考えられてきましたが、全体集計結果にその傾向は現れませんでした。これは、文系・理系を問わず、学部学生の「図書」を重視する割合が「雑誌・電子ジャーナル」を重視する割合を大きく上回ったからです。しかし、理系の院生では、「雑誌・電子ジャーナル」を重視する割合が、「図書」を重視する割合に極めて近くなり、さらに理系の教員では「図書」を上回ります。

文系でも専門性が高くなるほど「雑誌・電子ジャーナル」の重要性は高まるものの、「図書」をより重視していることがわかりました。

学生と教員では、図書館の学習・研究の場所としての機能に対する意識にも違いがありました。学部学生は開館時間や快適さを重視する割合が高くなりましたが、研究室に所属する院生や教員は、場所としての機能よりも、図書・複写物の取寄せやデータベースの充実などを重視しています。

大学図書館は、多様な利用目的に応えられ得る偏りのないサービスが必要とされています。

その他の調査結果の概要

回答者（身分別・所属別）

回答者の身分別構成比は母集団（京都大学全体）の構成員比と大差はありませんでしたが、教員・研究員の割合が若干高い傾向にありました。

利用頻度（来館利用・Web利用）

来館利用の頻度が「週1回以上」の占める割合は、文系79%、理系32%で、文系所属者は来館利用に重点を置いていると考えられま

す。（図2）

Web利用の所属別頻度には、それほど大差はありませんでした。

よく利用する図書館・室（来館利用・Web利用）

来館利用の第1位は附属図書館で、全体の3割を占め、人環・総人図書館の利用度も高い結果が表れました。Web利用では図書館機構と附属図書館が約6割、Webページを「使わない」と回答した層が1割以上を占めました。

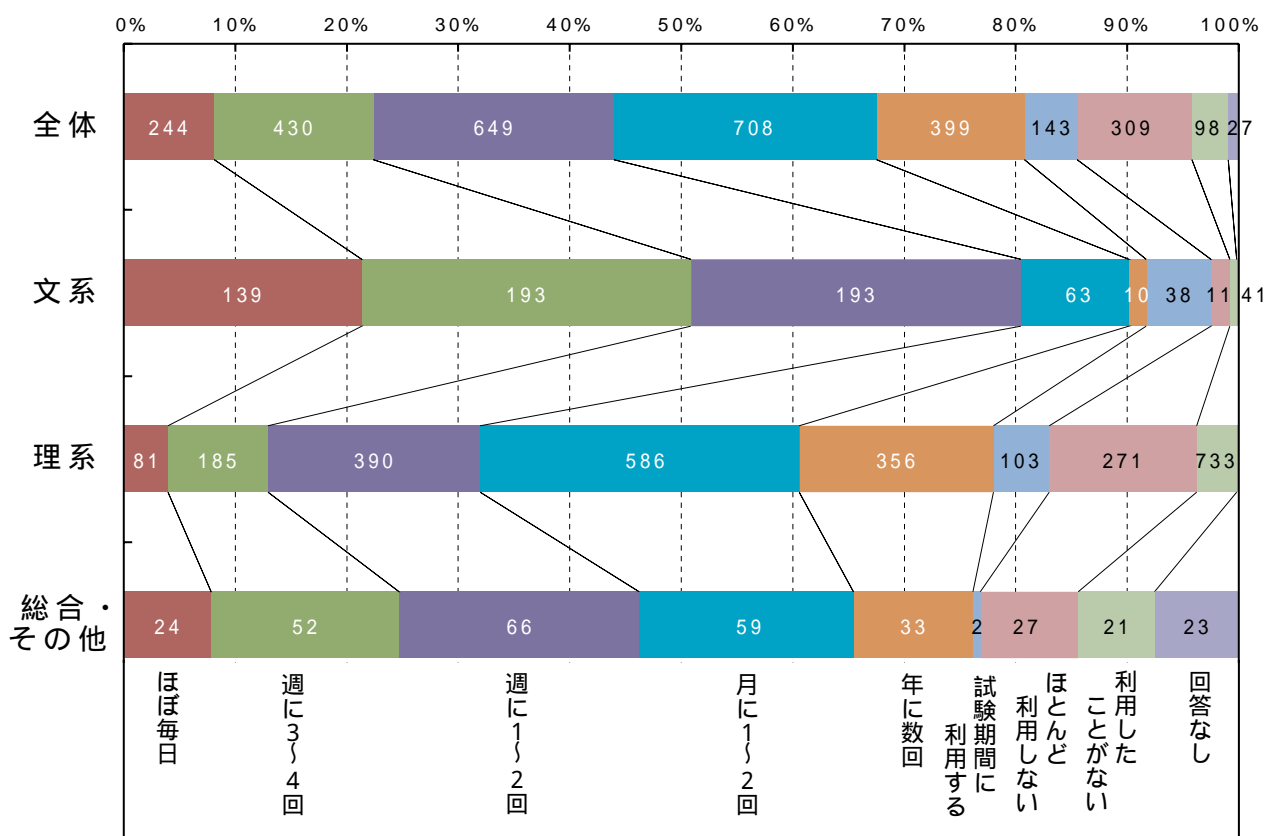


図2．図書館・室の利用頻度（来館利用）

理系所属者の Web 利用で医学図書館が上位に挙がりました。

学習研究における図書館・室、インターネット利用時間

図書館・室の利用目的

来館利用の目的は、図書・雑誌の利用が圧倒的に多く、文系よりも理系の方が雑誌の利用に重きを置いていることがわかりました。特に「電子ジャーナルの利用」は、文系の値がごく低いのに対し、理系の値は比較的高い結果が出ました。文系では「自学自習」の占める割合がやや大きいことがわかりました。

学習研究における図書館・室利用時間が1時間未満と回答した人の割合が全体の約45%を占めました。系別では、文系所属者は学習研究においてインターネットよりも図書館・室を利用する時間が長く、文系以外の所属者は逆に図書館・室よりもインターネットを利用する時間が長いことがわかりました。

今回は、アンケート調査結果から見えてきた、利用者からの「図書館への期待」を採り上げました。図書館機構では今後、多くの方に期待されている項目はもちろんです、少数派の意見も大切に受け止め、図書館サービスの向上に活かしていきたいと思います。ご協力ありがとうございました。

（図書館機構）

<特集：図書館への期待3>

「図書館を使いこなすための第一歩」

目からウロコの新発見!?図書館講習会

皆さんは図書館で行なわれている講習会をご存知でしょうか。

今回は利用者アンケートで残念ながら知名度の低かった図書館が行っている講習会について、実際に参加された方々の声を集めました。

人間・環境学研究科総合人間学部図書館(以下人環・総人図書館)開催の「パソコンで論文を手に入れよう!その1-電子ジャーナルの使い方」に参加された金子さん、ポケットゼミの1コマを活用して実施した附属図書館ガイダンス参加者の大塚さん、北脇さん。3人の目からウロコ(!?)の参加レポートをご覧ください。

「講習会のススメ」

参加者体験レポート(1)

人間環境学研究科共生文明学専攻修士課程

金子 典生

人環・総人図書館でアルバイトを始めてしばらく経った、ある日のこと。職員の方から今回の講習会へ参加するよう促された当初は、率直に言ってあまり気乗りがしなかった。というのも、文献調査のイロハに関しては、すでに充分過ぎるほど熟知していると感じていたからだ。とはいえ、後学のためにも一度は受講してみるのも悪くはないと思い、同じくアルバイト仲間である先輩と連れ立って参加してみることにした。結果としては、講習が開始してものの数分と立たない内に、自らの思い上がりを恥じ入ることになるのだが。

講習会は、他にも附属図書館と医学図書館で定期的実施されており、詳細については各HPを参照して頂きたいのだが、総人図書館に関しては、講習会は年間を通じて四回ほど設けられており、順を追うごとに難易度が向上する仕組みになっている。私が受講したのはその内の二回目に該当し、内容としては主に「書籍検索の仕方」といった「基礎中の

基礎」が中心となるので、「今さら何を教わる必要があるの?」などと冷笑交じりに問われる方もいるかもしれないが、侮るなかれ。いくつか実例をあげよう。

例えば、あなたは「ストップワード」という言葉をご存知だろうか。これは日本語では助詞、西洋語では前置詞等を指し、検索の際には無視されるので、基本的には検索資料の特徴的な単語をスペースで区切って入力するだけでOKなのである。ちょっとした豆知識ですね。

特に洋書を頻繁に検索される方には、検索記号(*, #)を使用した「前方一致」と「完全一致」がお勧めである。前者の場合、語尾に「*」をつけることで、複数形や語尾変化する単語も一挙に検索できて便利。また後者であれば、タイトルが一般的過ぎる名称の場合、語頭に「#」をつけて検索することで完全一致する結果のみが得られるので、これまた便利。

以上のように、本講習会では基礎的な画面

操作と並行して、こうした文献検索のときに使える「ちょっとしたコツ」が随所で紹介されたのだが、意外とこれまで盲点だった部分が多く、非常に参考になった。一見すると瑣末なことかもしれないが、きちんと把握しておけば、悉皆調査の際のストレスをかなりの程度軽減できるように思われる。また、講習の最後には解答付きのクイズが配布され（これがなかなか難しい）、各々の習熟度を確認できるようになっている。

本講習会の主な対象としては、学部一回生が想定されているように見受けられるが、個人的には是非とも参加を検討して頂きたいのが、筆者と同じく大学院に在籍する方々である。多くの方々が、これまでの勉学の過程で蓄積してきた独自のノウハウをお持ちであると察するが、一方で、過度な経験主義は禁物である。一旦初心に戻ったつもりで、講習会に参加されてはいかがだろうか。そこには思わぬ発見が待っているかもしれない。

（かねこ のりお）

「講習会のススメ」 参加者体験レポート（２）

法学部 1 回生
大塚 由梨

今回の講習会を受けるまで京大の図書館をまともに利用したことがなく、有効な利用法もいまいちわかっていませんでした。むしろ、今まで利用してきた高校などの図書室や近所の図書館と違って専門書が多い分、図書館の中をぶらぶら歩いて興味をひかれる本を見つけて借りる、というような本の借り方をしていた私にとっては近づき難く、どのように利用したらいいのか戸惑っていました。

授業が始まってからも平日に図書館利用講習会が行われているのは知っていましたが、実際には授業と重なっていて参加することができず、しかも、もしレポートなどで図書館を利用することが今後あっても本の借り方などはもちろん知っているのだし特に支障はないだろうと思っていました。しかし、今回授業の中で講習会を受けることができて本当に有益な情報を知ることができ、またレポート、論文を書く上でこの講習会は本当に役立つということを実際に自分がレポートを書いていく上で実感しました。

いざ授業でレポート課題が出されたときに、KULINE の使い方をしっかり理解していることが大きなアドバンテージになった気がします。

この講習会を受けるまでは KULINE をネットで開いて見てみようと思ったこともなく、検索エンジンで図書だけでなく論文も探すことができるといったようなことさえも知らなかったもので、講習会で KULINE がとても私たちにとって非常に便利なツールだということを知り、とても驚きました。KULINE を使うことで図書館そのものを利用しやすくなっただけでなく、キーワード検索する際にキーワードを単独で使っている書物を検索する方法など、自分ひとりでは知り得なかったような資料検索一般に使える方法もわかり、とてもためになりました。また、検索方法だけではなく、検索して集めてきた資料の使い方や、論文の



講習会風景

構成の仕方、参考文献の書き方など、論文を作成していく手順も細部まで教わり、レポートとはどういうものなのかすら理解していなかった私にとって本当に役立つ内容でした。

また何よりも近づき難い空気のあった図書館で、やさしく丁寧に色々なことを教えていただけたことによって、何かあれば図書館に行こうと思えるようになるくらい親しみを感ずることができるようになったことが私にと

って大きなプラスになったと思います。図書館の方が「図書館の人とより仲良くなればよい論文が書ける」というようなことを言われていましたが、本当にその通りだと感じました。今後さらに今回の講習会で学んだことを生かして、わからないことがあったときは図書館の方に相談しながら、図書館をうまく利用していけたらと思います。

(おおつか ゆり)

「講習会のススメ」 参加者体験レポート(3)

工学部1回生
北 脇 徹

今回、ポケットゼミナール「地域を究める」のレポートを作成するために図書館利用講習会を受けて、KULINE の機能をはじめ今まで知らなかったことを多々知ることができました。そのおかげでレポートを作るのに必要な資料を容易に集めることが出来ました。

KULINE の存在は入学した時から知っていましたが、一般的な図書館にあるコンピューター検索と同じようなものだと思っていました。しかし、単なる検索だけでなく他の機能もたくさんあってとても便利なものであることがわかりました。特に KULINE で便利だと思った機能は関連検索が出来ることです。今必要としている資料だけでなくそれに関連するジャンルの資料まで検索してくれるのはとても助かりました。自分でも思っていなかったようなジャンルの資料も検索してくれたので、広い範囲の資料を検討することが出来ました。表示のされ方もわかりやすく良かったです。

他に KULINE で便利だと思った点は自宅のパソコンで検索できたり、他大学の図書館の資料を調べたりできたりといったように京大内にとどまらない点です。実際には今回のレポートを作成するにあたって京大外の図書館の資料は利用しなかったのですが、これから

三回生や四回生になったとき専門科目でより専門的な資料が必要になったときに役に立つだろうなと思いました。

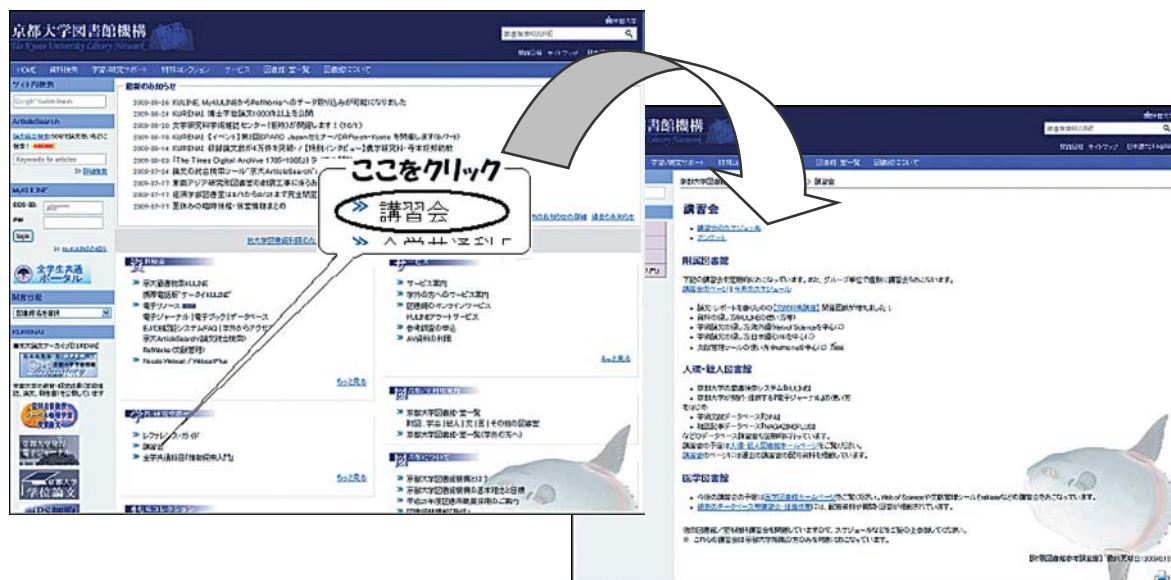
今回の講習会で KULINE の使い方のみならず、レポートの作り方も教えていただいたのは本当に幸運だったと思います。まだ自分は一回生なので本格的なレポートを書いたことがなかったのですが、どうやってレポートを書けばよいのか全然わかっていませんでした。調べたことを章に分けて書けばよい程度に思っていました。ですが今回の講習を受けてそんな簡単なことでは無いことがわかりました。課題を理解し、問題設定をし、アウトラインを決めて書き、執筆し、推敲するという流れや、上手いかなければもう一度問題設定をするといったように振り返って考えてみるといったことなどを学びました。これらを学べたおかげでスムーズにレポートを書くことが出来ました。

一回生の内に今回の講習会を受けられたことは本当によかったと思います。これから専門的なレポートを書く機会が増えてくると思うので、今回学んだことを活かしていきたいと思っています。

(きたわき とおる)

いかがでしたか？少しでも興味をもたれた方はぜひ、図書館機構のWebサイトから「講習会」のページをチェックしてみてください。講習会に参加すればきっと、今まで以上に図書館を使いこなせるようになるはずです。

京都大学図書館機構 Web ページ <http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/>



11 月以降図書館講習会予定

< 附属図書館 >

定期講習会(30分～1時間程度)を各2回

- ・資料の探し方: KULINE
- ・学術論文の探し方: 日本編 CiNii
- ・学術論文の探し方: 海外編 Web of Science
- ・文献管理ツールの使い方: RefWorks
- その他

・論文・レポートを書くための文献収集講座
11/16(月)・26(木)・12/9(水)1時間程度

・DBベンダーによる講習会

Jdream (初級): 11/12(木)13:30～15:00

RefWorks(中級): 11/25(水)13:30～15:00

Scopus: 12/10(木)13:30～15:00

Web of Science: 12/16(水)13:30～15:00

個別対応講習会(申込制)

- ・グループ・ゼミ単位での文献収集講習会
申込先 附属図書館参考調査カウンター
FAX: 075-753-2650

E-mail: ref@kulib.kyoto-u.ac.jp

< 人環・総人図書館 >

12月: パソコンで論文を手に入れよう!

外国語論文編 Web of Science & JCR

< 医学図書館 >

初心者向け「文献管理」講習会 - 1・2 -

(DBベンダーによる講習会)

1. RefWorks講習会(初級)

11/25(水)17:00～18:30 頃

2. EndNote講習会

11/26(木)17:00～18:30 頃

問合先: 医学図書館閲覧担当

TEL: 075-753-4323 / FAX: 075-753-4318

E-mail: ref@office.med.kyoto-u.ac.jp

* 京都大学所属の方を対象としています。

* 最新情報や詳細はWebサイトをご覧ください。

<一冊の本シリーズ14>

Looking Back: The Autobiography

地域研究統合情報センター教授 押川 文子

本は世界中で書かれている。あまり馴染みのないところで出版された本でも、読むと身近に感じる本も多い。というわけで今回の「1冊の本」は、インドの近代を考えるものとして、少し風変わりな、日本とも小さからぬ縁のある本を取り上げてみたい。

この本の著者ドン・ケーシャブ・カールヴェ(Dhondo Keshav Karve)はインドの社会運動家。インドが正式にイギリス植民地となった1858年に西インドの農村部で生まれ、パックス・ブリタニカと呼ばれた植民地安定期から民族運動、国家建設の時代を生き抜き、1962年に104歳という長寿を全うし生涯を終えた。19世紀末、寡婦のための学校を開設し、1917年には日本女子大学の成瀬仁蔵の著書に強い影響を受けて「インド女子大学」(後のSNDT女子大学)を設立。独立後の1958年には、寡婦問題や女子教育など女性の地位向上についての長年にわたる貢献に対して、インド最高の勲位であるパール・ラトナ勲章を授与されている。ガンディーやネルーのように国際的に知られた人物ではないが、インドでは著名な人である。とりあげた「1冊の本」は、彼が78歳の1936年に英語で著した自伝である。私がこの本を初めて読んだのは、20数年前のことだった。それから何度か折に触れて読み返したが、功成り名を遂げた人の晩年の回顧譚といったカビ臭さがまったくなく、その都度新しい発見があり、そしていつも日本のこ



Dhondo Keshav Karve
(Died 26th April 1962)

とを考えさせられる。

カールヴェが自身の社会活動として最初に取り組んだのが寡婦の再婚と教育である。19世紀後半、西欧との接触を契機に、インドの知識人の間では社会改革の必要性が認識されるようになった。その一つが「寡婦」問題である。当時、カースト制度の前提となる出生の正統性を保証するものとして、一部の上位カーストの間では、娘を思春期前に、場合によっては幼児のうちに結婚させることが通例となっていた。女兒の従順さを損なうとして女兒教育も禁忌された。そのこと自体も多くの問題を生んだが、幼い妻が寡婦になってしまうとより悲惨で、存在そのものが不吉だとして剃髪し装飾も許されず一生を日蔭者として婚家先や実家の片隅で生きることを強いられた。こうした例も死亡率の高い当時では珍しいことではなかったのである。西欧との接触を契機として徐々に形成されつつあった新しい思想をもつ知識人の間では、この幼児婚、寡婦問題や女兒教育など「女性問題」が、改革すべきインドの伝統の象徴ともみなされ、盛んに議論されていた。

ただ、改革は単純ではない。植民地状況のもとで次第に形成されつつあったナショナリズムが拠り所としたのも、インドの文化伝統だったし、婚姻や出生はコミュニティが強い拘束力をもつ領域だけに、抵抗も強かった。例えば寡婦再婚を提唱する男性の多くも、自身や家族のこととなると社会的制裁が待ち受けているだけに二の足を踏んでしまうし、改革が「非ヒンドゥー」や「非インド」とみなされると人々の支持は得られない。いかにしてヒンドゥーの、あるいはインドの枠内で改革するのか。人々に受け入れられる改革

のかたちとはどんなものか。インドの「寡婦問題」は特殊に見えるが、実は、非西欧世界の近代、とくに植民地状況のもとで多くの社会が経験した、ナショナリズム、保守主義、改革が織りなす複雑な関係の例の一つである。ちなみにインドでは、20世紀にはいり民族運動が具体的な政治的主権の獲得を目指して本格化すると、多くの課題を積み残したまま「女性問題」は舞台の背景に消えていく。

カールヴェの自伝は、こうした19世紀後半から20世紀初頭の改革をめぐる様々な動きを、いわば当事者、同時代の目で詳細に伝えてくれる。しかし彼の自伝を面白くしているのは、改革の記録というだけでなく、彼自身が、寡婦問題や女児教育が時代の焦点となった文脈からは少しずれた地点に立っていたことにあるように思う。

カールヴェは、その時代の知識人の多くとは違って、資産家や有力者の家系の生まれではなく、片田舎の少年が苦学の果てに学歴を得て知識人社会に仲間入りした、いわばインド版学歴エリートのはしり、という人物であり、保守的な西インドの農村や田舎町の上位カーストのあり様を骨身にしみて知っていた。また、理念を語るより理念を生きる実際的な生活人でもあった。先の寡婦再婚の例をひけば、社会的排斥を経験しながら自身が寡婦と再婚しているし、世の中の関心が民族運動に移ったのちも、女子学校の経営から離れることはなかった。

同時代の知識人の間では、カールヴェは、おそらく若干迷惑な、今の言葉でいえば「空気が読めない」存在で、偉人と変人との間で評価が分かれたのではない。自伝にも理念的な議論よりも、その時々になにをしたか、いくら費用がかかったか、生活はどうしたか、誰に会ったか、等々が、実に淡々と、そして詳細に綴られている。その記述が面白い。

例えば、19世紀の後半、田舎の少年はどのように学んだのか。植民地インドの教育制度は、植民地都市を中心に設置された英語による高等教育が中心だった。カールヴェが生まれた西インド

の農村部にはまだ学校とよべるものはほとんどなく、たとえ5学年までしかない「^{ヴァナーキュラー・スクール}現地語学校」で学んでも、英語高等教育とは接合しない。村の寺子屋での学び、現地語学校の実態、徒歩と船で大変な経験となった遠くの町での修了試験、偶然から英語を勉強できたこと、編入試験で高等学校へ・・・と、自伝はこの接合しないシステムのなかで学歴を獲得する過程を詳細に叙述する。晴れてボンベイ(現ムンバイ)でカレッジに入学したのちの苦学、奨学金とより有効な学歴を求めての転校、そして名門エルフィンストン・カレッジの教授職へ。大変だった、苦労した、とは一言も書いてないが、この時代の教育「システム」(の分断)のあり様を、これほどわからせてくれる記録は珍しい。ボンベイのカレッジ時代については、家計に関する詳細な記述がある。学校運営の寄付金集めに回った西インドの田舎町や村々の記録も詳細なリストにしている。鉄道、徒歩、牛車で何時間かかったか、どの村で、誰から、いくら寄付をうけたか。寄付金はパイサ(1ルピー=100パイサ)単位まで。読んでいるとその時の情景まで目に浮かぶ。

そのカールヴェがたどりついた女子教育の理想型が、成瀬仁蔵の「日本女子大学」だった。賢く合理的で、しかも「日本」女性の高等教育。誇り高い良妻賢母の育成。自伝には、成瀬の著作からうけた強い衝撃が綴られている。インド知識人や教育関係者の間では、女性だけの高等教育機関は水準を落とすだけ、という議論がその当時も今も支配的で、女子カレッジは多数あるものの、女子大学はカールヴェが創設したSNDT女子大学のみである。ここでもカールヴェは時代からずれてしまうのだが、このずれは、理念を語るよりも理念を生きてしまった人の宿命だったかもしれない。

インドを対象とした地域研究に携わる筆者にとっては、インドと日本である時期、まったく面識のない二人の教育実践者が同じかたちの女子教育を夢想したという事実が、いつも気になっている。

(おしかわ ふみこ)

フィールド科学教育研究センター森林系図書室の紹介

フィールド科学教育研究センター森林系図書室は農学部総合館北東角の一階に見過ごされそうながら、こぢんまりとあります。2007年12月までは同じく北東角の二階にあり、耐震改修工事の後2008年8月に現在の場所で開室しました。ご存じの方もおられるでしょうか、前身は農学部附属演習林図書室です。2003年4月、理学研究科、農学研究科に附属していた瀬戸臨海実験所(白浜)、演習林(京都・芦生・和歌山・徳山・北海道)、亜熱帯植物実験所(串本)、水産実験所(舞鶴)を統合した全学共同利用の「フィールド科学教育研究センター(フィールド研)」が発足し、当室もフィールド研森林系図書室となりました。ちなみにKULINE 検索結果で、所蔵館: フィ森林、配置場所: 森林系本部と表示されますのが当室です。

農学部創設以前からの演習林の長い歴史の中で図書室は農学部総合館竣工の1977年に開室されたようです。大正年間受入の蔵書を手に取りますと、この場に定位置を与えられるまでの紆余曲折を思い、今もなお利用者の手にも眼にも触れる幸運を思います。新旧とりまぜ当室の蔵書の構成は、主要な分野は林業・林学ですが、演習林における教育・研究の内容が木材生産を主とした内容から森林の生態や森林を取り巻く自然環境に関する課題の増加へと移り変わっていくなかで、生物学・植物学・動物学・環境保全学などの分野の増加を見せています。ご多分に洩れず当室にもスペース不足問題はありましたが、2001年に農学部図書室のご協力により、重複雑誌を整理し戦前の台湾・朝鮮・樺太演習林時代の資料も移りましたのでしばらくの余裕はできました。その後10年間の資料の蓄積はありますが改修工事後は以前より書架スペースを多くとれま

したので、今後はフィールド研の発足と並んで提唱された新しい学問領域「森里海連環学^{もりさとつみ}」の成長とともに、蔵書のひろがりも見せていくことと思います。

ここで、当室利用について少々。当室は閲覧システムを使用していないため利用者の方々にとってはとまどいの『牧歌的』図書室かと思います。言葉を発し文字を手書きしなければ一冊の図書の貸し出しも儘ならぬというわけです。目的の資料が当室にしかないのであればお立ち寄り下さるでしょうが、と当室紹介もためらいがちになってしまいます。こんな当室ですが三回生や学部外の方のなかにも常連さんがおられることを知ったときのうれしさといったありませんでした。書架を眺めてそして毎回数冊の図書を借りて行かれます。それから学内デリバリーサービスについても少々。所蔵館がフィ森林とある資料の受付窓口は当室が対応しております。森林系本部(当室)以外の配置場所には図書系担当者がいないためなのですが、遠隔地配置場所から一度当室に届き当室からお手元へとなりますので通常の図書館(室)間の配送よりも時間をいただくことになります。

当室は今日望まれる図書館の利便性にはあれこれ遅れがちなところもありますが、できるかぎり利用者の方々に添っていきたいと思っています。

本臥せて いつも眼とあふ 木守柿

福田夢汀

(フィールド科学教育研究センター
森林系図書室)

KURENAI コンテンツ紹介

KURENAI 登録4万件目にあたって

農学研究科助教 寺本 好邦

附属図書館の方より、このほど KURENAI に登録した論文(*Biores. Technol.* , 100, 4783 (2009))がちょうど4万件目にあたるということで、記念の原稿を書く機会を頂いた。全くたまたまではあるがせっかくの機会なので、当該論文を紹介し、論文投稿の状況や自然科学分野の構成員から見たリポジトリへの意見を述べたい。

【論文の紹介】

私は、木材とその構成成分(セルロース、リグニン等)をはじめ、関連する多糖類など各種生物由来素材を対象に、その分子・材料特性を究めつつ、異種素材との複合化による機能材料化やリファインニングによるエネルギー変換を行っている。今回の論文は、木材からのバイオエタノール生産に必要な前処理技術について報告するもので、主に前所属先の(独)産業技術総合研究所で検討した結果がベースとなっている。原油価格高騰の折にしばしば報道されたガソリンに代わるバイオエタノールは、既にトウモロコシデンプンや砂糖(ショ糖)から生産されている。その一方で、単位面積当たりの蓄積量が大きく食用と競合しない木材に含まれるセルロースをグルコースに変換(糖化)し、それを発酵してエタノールを生産する技術確立しておくことは、長期的には重要な課題である。しかしながら、樹体支持を目的とした巧妙な階層構造をバラバラにして糖化に持ち込むのは困難、という認識が一般にはある。この論文では、エネルギー投入量やプロセスの環境対策を考慮した穏やかな処理でも木材の酵素糖化率を高められるということを実験的に示した。今後はこの処理の効果を構造論的に解明し、酵素糖化率と構造要因の相関を示すこれまでにない尺度を見出すことが課題である。

【論文投稿の状況】

私の分野の助教クラスの研究者であれば、自分が密接に関わった論文を1年に2報以上は国際誌で発表したいと考えていると思う。個人的には、自ら進めている研究のほかに、現状では修士修了で就職する学生さんが多いので、彼らが在学中にメインで論文を執筆し、国際誌に1報は投稿できる状態にしておくというのが理想である。それが間に合わなくても、そう遠くない時期に学生さんが著者となった論文を投稿することを目標としている。

【KURENAI への意見】

研究成果を公表したいのは様々な立場の構成員に共通の心理かと思う。私自身、学部～修士課程ではそれが叶わなかったのが、博士課程で初めて論文が掲載された時の高揚感は大きかった。この感覚は、(国際誌で成果発表するのが一般的な分野であっても)卒論・修論を投稿論文の前段階としてリポジトリで保存・公開することにより、在学中の学生さんとある程度共有できるかもしれない。知財の取扱いや事務作業の増大等の問題はあろうが、公開可能な範囲での抄録でも構わない。この種の情報は通常入手困難であるし、研究の背景をかなり遡れるので、利用者にもメリットがある。

登録の推進にあたっては、リポジトリのステイタスが高いことが若年層への良い動機付けとなると考える。費用や労力との兼ね合いではあるが、全学の研究成果発表を網羅したデータベース化の仕組みを別途構築し、それと同期させるのも一考かと思う。ステイタス向上のため、益々のデータ集積と、成果発表の属性・査読の有無・使用言語ほかのメタデータや検索機能の拡充、並びに英語版の充実を望む。

(てらもと よしくに)

IFLA(国際図書館連盟)2009年ミラノ大会参加報告

附属図書館研究開発室准教授 古賀 崇

1. はじめに

IFLA(国際図書館連盟)の2009年度年次大会はイタリア・ミラノにて2009年8月23日(日)~27日(木)に開催された。大会終了後の報告によれば、全日登録参加者数は2588名、1日登録の者とあわせると3139名の参加があった(<http://www.ifla.org/annual-conference/ifla75/xpress8-en-2009.pdf>, 出展者や会場ボランティアなどは含まず)。日本からの参加者は、長尾真・国立国会図書館長(本学第23代総長・名誉教授)ほか40名程度であった。

今回のIFLA大会では、例年に比べると学術情報のオープンアクセスに関する発表が目立った。筆者もこの発表を中心に聴講したので、本稿ではこれらの発表で示された各国のオープンアクセスの動向を中心にまとめてみたい。なお、各々の発表については大会ウェブサイトにて大半のペーパーが公開されているので、詳しくはそちらをご参照いただきたい(<http://www.ifla.org/annual-conference/ifla75/programme2009-en.php>)。



開会式にて、大会国内実行委員長 Mauro Guerrini 氏
(イタリア図書館協会会長)のあいさつ

2. 学術情報のオープンアクセスをめぐる動向

2.1. 新興国・発展途上国でのオープンアクセス

今回特筆すべきなのは、日本では取り上げられることの少ない、いわゆる「先進国」以外の新興国・発展途上国におけるオープンアクセスについて、今大会で多く紹介されたという点である。

まず、農業・漁業といった第一次産業は発展途上国が担う度合いが強いが、今大会における農業図書館ワーキング・グループのセッションでは、農業・漁業関連のオープンアクセス活動が紹介された。漁業・水産学・海洋学などについては、この領域の図書館(北・中・南米の館が中心)による国際団体「水圏・海洋学図書館・情報センター国際協会(International Association of Aquatic and Marine Science Libraries and Information Centers)」により、主題リポジトリ“ Aquatic Commons ”(<http://aquacomm.fcla.edu/>)が運営されている。このセッションではインド、ケニヤ、ジンバブエといった国々での農業関係のオープンアクセス活動も紹介された。

また科学技術図書館分科会のセッションでは、eIFL.net という団体の Iryna Kuchma 氏が主に東欧・アフリカ地域でのオープンアクセス活動を紹介した。eIFL.net は投資家・慈善家として知られる George Soros 氏率いるソロス財団のプロジェクトを起源とし、発展途上国や旧社会主義国の図書館における電子情報アクセスを支援している団体であり、その活動にリポジトリ構築やオープンアクセスへの支援も含まれる。Kuchma 氏はウクライナ、リトアニアなど東欧で「政府支援による研究成果のオープンアクセス」を法律で義務

づける動きがあること、また香港や南アフリカでは個々の大学レベルでオープンアクセスの義務化へ進んでいることを取り上げた。これを踏まえ、「研究者は多忙なゆえ自主的なオープンアクセス参加に多くは望めない。よって、何らかの強制がないとオープンアクセスは進展しない」との見方を示した。

この他、北アフリカ・中東の研究者・出版者にとってのオープンアクセスへの関心・関与に関する実態調査、ウガンダやマレーシアの大学等における機関リポジトリの動向なども、この大会において紹介された。

2.2. オープンアクセスをめぐる技術

情報技術分科会セッションでは、オープンアクセスに関する技術面の動向について発表が行われた。そのひとつに、イタリア・フィレンツェ大学が開発している、P2P 技術を利用したリポジトリ・コンテンツの管理・アクセスのシステム “AXMEDIS” (<http://www.axmedis.org/com/>) がある。発表を行った Emanuele Bellini 氏 (フィレンツェ大学) は、既存のオープンアクセスのシステム (Open Access Initiative、DSpace など) はアクセス面の向上にはあまり目を向けていないと指摘した。具体的には、検索手段の豊富さ、ユーザーインターフェース、利用者による情報の付加、国際レベルでの包括的な目録構築などに課題があるとし、これらの点の解決策として P2P 技術によるシステム構築を提案している。AXMEDIS は P2P 技術の活用により、アクセス面の柔軟性の向上と、情報保存の保証という点の両立が可能としている。

このセッションではほかに、ウェブ上のコンテンツを対象に永続識別子 (Persistent Identifier) として「全国書誌番号 (National Bibliography Number)」を付与し管理を試みるイタリアの取り組みや、欧州で博物館・図書館・文書館 (MLA) にまたがる文化遺産のデジタル化・組織化の国際プロジェクトとして進められている “Europeana” の現状と今後の計画などが紹

介された。

3. 文化遺産やデジタル・アーカイブをめぐる統計活動

今大会の発表に関してもうひとつ取り上げたいのは、「統計・評価」「情報技術」「修復・保存」の各分科会が合同で行った、主に欧州各国での文化遺産やデジタル・アーカイブをめぐる統計活動を紹介するセッションである。うち、オープンアクセスに近いところではドイツの “Open Access Statistik” プロジェクト (<http://www.dini.de/projekte/oa-statistik/english/>) が紹介されたが、これは学術情報に限らず、今後は文化遺産全体に関する取り組みへと拡張させていきたい、との意向が担当者より示された。その他、このセッションでは、館内での資料修復に関する判断基準や、国ないし欧州単位でのデジタル・アーカイブの管理・利用に関する統計把握の試みなど、MLA にまたがる統計活動についてさまざまな取り組みが紹介された。特に、国立図書館のためのパフォーマンス指標であり保存活動も視野に入れた ISO/TR 28118: 2009、デジタル・アーカイブの運用体制を定めた「OAIS 参照モデル」を国際標準化した ISO 14721:2003 など、MLA 活動に関する国際標準の役割がしばしば強調されている点には注意を要するだろう。また、デジタル・アーカイブの統計活動については、リポジトリなど電子上の図書館活動に関する統計と重なる点も多いと思われる。

4. 政府情報・公的刊行物分科会 (GIOPS) の活動

筆者が分科会委員として携わっている政府情報・公的刊行物分科会 (GIOPS) の活動についても触れておきたい。GIOPS のセッションでは米国、ボツワナ、インド、中国からの発表が行われた。リビアからも発表予定だったが大会に参加できず、ペーパーのみの発表となった。うち、米国からは政府刊行物の電

子化の進展のもとで、その国際交換活動をいかに進めていくか、に関する議会図書館・政府印刷局の取り組みが紹介された。また、中国では情報公開規定の整備が進み、政府が国立公文書館および各地の公共図書館を「政府情報へのアクセスを提供する場」と指定したという事例が報告された。

GIOPSの委員による事務会合では主に次回(2010年)IFLA大会での企画について審議を行った。もともとは豪州ブリスベンでの大会開催にあわせて、大会開催前にシドニーでサテライト会議を開く予定だったが、後述の通り開催地が変更となったため、この企画は中止を余儀なくされた。代わりに、スウェーデン・イエーテボリでの大会期間中の企画として、政府機関図書館分科会、法律図書館分科会などと合同で、「戦争・紛争にかかわる国内・国際特別委員会の記録へのアクセス」をテーマにしたセッション開催を検討することとなった。



GIOPSセッションの様子

5. 感想など

繰り返しになるが、今回の大会で最も印象的だったのは、「先進国」以外の新興国・発展途上国と呼ばれる地域でのオープンアクセスの実情が示された、という点である。この中で、何人かの発表者は以下のようなことを訴えていた。「オープンアクセスには“南北問題”がある。つまり「北」の恵まれた研究者らがオープンアクセスについて議論し実践に取り組んでいるにもかかわらず、「南」にはその恩恵

が十分には届いていない。そもそもコンピュータやインターネットの環境が整っていない国や地域も多いし、研究者や出版者らがオープンアクセスの意義や実情を正確に理解しているかどうかも疑わしい」。こうした状況のもとで、さまざまな角度から新興国・発展途上国でのオープンアクセスの取り組みが報告され議題にあがった、というのは筆者にとってまさに「耳目を開かれる」経験であった。日本からも新興国・発展途上国におけるオープンアクセスに何らかのアプローチができないか、ということを感じながら帰国の途についた。

なお、今回の大会では上記で取り上げた項目以外にも、Googleブック検索をめぐる当事者(Googleスタッフ、出版社団体、弁護士、研究者ら)をまじえての議論、電子書籍(e-book)の管理やサービスに関する各国の取り組み、ユネスコの「世界デジタル図書館」「世界の記憶(いわば世界遺産のMLA資料版)」プロジェクトをめぐる議論、さらには日本からも発表があったポスターセッションなど、数多くの興味深い発表・議論に触れることができたが、紙幅の都合で省略させていただくことをご容赦願いたい。

次回2010年のIFLA大会は豪州ブリスベンで開催される予定として告知されてきたが、金融危機の影響で豪州国内での財政的支援が見込めなくなったことを理由に、開催1年前の時点で開催地がスウェーデン・イエーテボリに変更となった。イエーテボリでの大会期間は8月10日(火)~15日(日)(うち初日は分科会事務会合等に充てられる)の予定である。

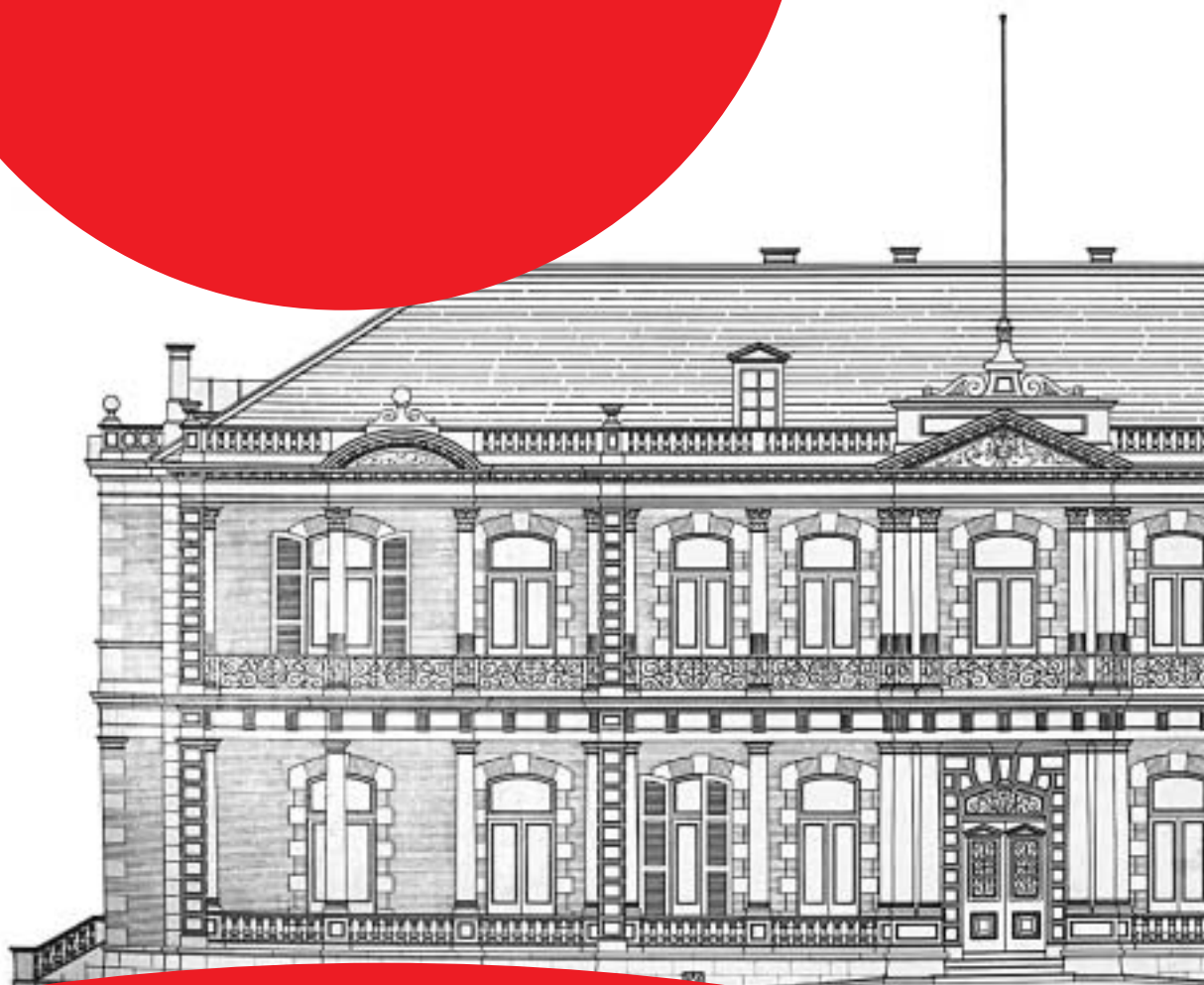
最後に、筆者の今大会参加は以下の補助によるものであることを付記しておく。

平成21年度文部科学省科学研究費補助金若手研究(B)「図書館・文書館等における政府情報の保存・アクセスをめぐる比較制度的研究」

(課題番号21700272、研究代表者:古賀崇)

(こが たかし)

Josiah Conder Drawings



平成21年度京都大学図書館機構公開企画展

日本文化に見た夢 お雇い外国人建築家コンドル先生 重要文化財「ジョサイア・コンドル建築図面」

2009年12月2日（水）－24日（木） 京都大学総合博物館

- 開館時間：9時30分－16時30分（入場は16時まで） 休館日：月・火曜日
- 入場料：一般400円／大学生・高校生300円／中学生・小学生200円
※20名以上団体割引あり※70歳以上の方・身体障害者手帳をお持ちの方は無料
- 主催：京都大学図書館機構 共催：京都大学工学研究科・京都大学総合博物館
- 問合せ先：〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学図書館機構 Tel. (075)753-2613 <http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp>
京都大学総合博物館 Tel. (075)753-3272 <http://www.museum.kyoto-u.ac.jp>

〔記念講演会〕

『ジョサイア・コンドルと日本文化』

日時 12月11日（金）14:00～15:00
場所 京都大学総合博物館ミュージラボ
講師 高橋康夫氏
（京都大学大学院工学研究科教授）

図書館の動き

平成21年

- | | | | |
|-------|-------------------------------------|---------|-----------------------------------------|
| 7月 2日 | 講演会(平成21年度第1回)「京都大学における大学文書館の仕事と役割」 | 8日 | 京都大学図書館協議会第一特別委員会(平成21年度第2回) |
| 6日 | 大学図書館職員長期研修(～17日筑波大) | 9日 | 京都大学図書館協議会第三特別委員会(平成21年度第2回) |
| 9日 | CSI委託報告交流会(～10日NII) | 15日 | 京都大学図書館協議会幹事会 |
| 16日 | 個人情報保護に関する講習会、情報セキュリティ講習会 | 17日 | 図書系連絡会議 |
| 17日 | 国立大学図書館協会人材委員会 | 18日 | 京都大学図書館協議会(平成21年度第2回) |
| 23日 | 図書系連絡会議 | 26日 | ジュニアキャンパス(～27日) |
| 27日 | 京都大学図書館協議会第二特別委員会(平成21年度第1回) | 29日 | 大学図書館職員短期研修(～10月2日) |
| 31日 | 国公立大学図書館協力委員会 | 10月 15日 | 近畿イニシアティブ中級研修(～16日大阪市大) |
| 8月 6日 | オープンキャンパス2009(～7日) | 22日 | 国立大学図書館協会人材委員会(山形大) |
| 23日 | 平成21年度職員採用二次試験(図書系) | 23日 | 国立七大学附属図書館協議会(東北大) |
| 26日 | 平成21年度職員採用面接考査(図書系)(～27日) | 29日 | 図書系連絡会議
京都大学図書館協議会第三特別委員会(平成21年度第3回) |
| 9月 2日 | 京都図書館大会(同志社大) | | |

目次

<特集：図書館への期待2> 図書館を採点！

京都大学図書館機構利用者アンケート調査報告 1

<特集：図書館への期待3> 図書館を使いこなすための第一歩

- 目からウロコの新発見！？ 図書館講習会 -

.....金子 典生・大塚 由梨・北脇 徹 .. 8

Looking Back: The Autobiography <一冊の本シリーズ14> 押川 文子 .. 12

フィールド科学教育研究センター森林系図書室の紹介 14

KURENAIコンテンツ紹介 KURENAI登録4万件目にあたって 寺本 好邦 .. 15

IFLA(国際図書館連盟)2009年ミラノ大会参加報告 古賀 崇 .. 16

平成21年度京都大学図書館機構公開企画展 19

図書館の動き 20

編集後記

テーマ「図書館への期待」2号目の今号では、皆さんに協力をいただきました利用者アンケートの調査結果と、図書館講習会に参加いただいた3名の利用者の方のご感想を掲載しました。来号は、また別な角度から、利用者の皆さんの「図書館への期待」を取り上げる予定です。(n)